

視覚障害と重度の知的障害のある生徒の 自立活動の指導

—— 歩行指導を中心にして ——

群 教 セ	I01-10
	平 15. 217

特別研修員 岩田 嘉光(群馬県立盲学校)

《研究の概要》

視覚障害と重度の知的障害を併せ有するA女は、粗暴で情緒不安定であった。A女の気持ちに添う歩行指導を工夫して、それを自立活動の時間に継続的に実施したところ、心理的な安定をもたらすことができた。さらに、生活のリズムが確立し、対人関係の改善も見られ、日常生活の自立の学習やコミュニケーション確立のための学習を進める基礎を築くことができた。

【キーワード：重複障害、自立活動、歩行指導、心理的な安定】

主題設定の理由

1 盲学校の重度・重複化

ここ数年の傾向として、生徒数の減少と知的障害を併せ有する重度・重複障害児の増加が見られるようになった。盲学校は、今まで教科学習を中心にした指導を行ってきた。今後は、視覚障害に対応した指導体制だけでなく、軽度から重度の知的障害を併せ有する児童生徒にも対応した指導体制も整えていかなければならない。

2 重度の知的障害のある児童生徒の歩行指導

視覚障害のある児童生徒は、環境に積極的に対応していこうとすると、歩くことがその基礎となる。そのために知的障害のない視覚障害児童生徒は、より確かなメンタルマップの形成や、安全確保のための手続きを学習していく。ところが、知的障害を併せ有する視覚障害児童生徒は、周りの環境を理解することが難しいため、自ら判断して活動できる場所が家庭や学校の一部などに限定されることが多い。特に、重度の知的障害を併せ有する児童生徒の場合は、活動範囲が極端に狭まってしまうことが多い。盲学校一般の歩行指導は、手引き・トレイル・白杖と段階を踏み、また場所も室内、校庭、一般道路と学習を進めていく。しかし、知的障害を併せ有する視覚障害児童生徒は、このような段階を踏んで指導していこうとしても、なかなかステップアップしていかない現実がある。

3 重複障害のあるA女の歩行指導

歩こうとしないから、歩く機会が減る。歩こうと誘うと拒否を示すため、さらに機会が減るという悪循環を断ち切る必要があると考えた。

歩くことは、1)体のバランスが良くなること、2)年齢に関係なく足腰には適度の鍛錬になること、3)心肺機能が丈夫になること、などが知られている。歩くことに慣れて、外の環境に慣れて、歩くことの楽しさを味わい、歩くことを生活のリズムの中に取り入れていけば、結果として歩くことそのものがA女の心理的な安定につながっていくのではないかと考えた。

対象の生徒

1 対象生徒 盲学校中学部 1年重複障害学級 女子

2 実態

< 食事・排泄 >

- ・睡眠や食事のリズムが不安定で、学校での生活態度も安定度に欠ける。
- ・食事は、フォークに刺してやると口元に運ぶことができるが、手づかみで食べることが多い。
- ・サラダや肉類を好み、気に入らないものは食べない。間食が多く、かなりの量の菓子類を食べていると思われる。肥満傾向である。
- ・たえず口元におもちゃの類を持っていき、口の中に入れたり、なめたり、かじったりして遊んでいることが多い。
- ・かんしゃくを起こすと、口の中に砂を入れたり、床に頭を打ちつけたりする。食べたものを意図的にもどすこともある。不安定になると、叫ぶような声を出し、他害の行動がみられる。
- ・トイレは、自分からは訴えないが定期的に促すと指示に従ってすますことができる。

< 感覚・運動 >

- ・視力は測定不能であるが、全盲であると思われる。
- ・平台の上に乗ったり、公園のベンチの上に乗ったりするのが好きで、体のバランスを取りながら遊ぶ。
- ・水筒の栓を回してはずし、水を飲むことができる。指の力は強い。
- ・教室からトイレ・音楽室は位置関係を理解している。その他の教室移動についてもおよそ理解していると思われる。教室内の自分のロッカーとおもちゃ置き場と専用のトランポリンの場所は把握している。
- ・自分の好きなおもちゃを触察で探することができる。

< 情緒・安定 >

- ・悲しいときは悲しそうな声を、うれしいときはうれしそうな声を出す。コミュニケーションのための言語は獲得していない。ときおり「やだ」に近い発音で拒否の態度を示すときがある。また、ごくまれにオウム返しで単語を発することがある。
- ・安定しているときは、日常生活の流れの中での教師の声かけには従える。また、教師の言葉に手拍子で対応することができる。
- ・集団の場面には、雰囲気を理解し、本人なりに緊張感を持って参加している。ただし長続きはせず、パニック状態になることが多い。
- ・教室でおもちゃを手にしてトランポリンに寝そべっているときには安定している。
- ・体育で走ることや歩くことを強要すると、ねそべったり靴をぬいだりして抵抗する。

< 今までの生活の流れ >

- ・小5年生から6年生の間に、肥満になりそれにつれて運動量も減ってきて、現在にいたっている。
- ・他害の傾向は以前からの問題点であり改善されていない。
- ・神経質で、警戒心が強い。
- ・名前を優しく連呼したり、スキンシップをしたりすると笑顔で応えることがある。
- ・1日の生活の流れは、およそ理解していて流れに沿って活動している。
- ・やりたくない体育になると泣いたり地団駄を踏んだりする。体育の時間帯が過ぎるとケロ

ッとしている。

3 A女に対する教師の考え

以下の3点を、A女の指導内容を組み立てていく上でのポイントであるにとらえた。

(1) 音楽が好きである。

歌をうたって接していると、うれしそうな顔を見せることがある。また、いっしょにリズムをとるような動作をすることがある。鼻歌で何かの歌の一節を歌うことがある。他人の声に拒否反応を示すことがあっても、音楽に拒否反応を示すことはめったにない。

教室に音楽が流れていたり、教師が歌をうたって接したりする音楽環境を好む。また、それらの曲を覚えることもあり、何気なく流れている歌や曲に対して、積極的に聴いているということが分かる。

(2) 教師の声かけが伝わる。

比較的落ち着いているときに、「靴を履いて」と声をかけると、自分から靴を履くことがある。また、給食前には「手を洗うよ」と声をかけると、自ら水道の位置まで移動することができる。落ち着いているときや自分が見通しを持てる活動では、コミュニケーションが成立することがある。

(3) 体を動かすことが好きである。

椅子の上で立ち上がったたり、マットの上に寝ころんだりして遊ぶことが多い。教室から庭に出ようとするような態度を見せることもある。強制しない運動では、運動量は授業の1時間分くらいは動くこともある。体を動かしているときに、体を接触させてA女と同じような動作をしても、嫌がるそぶりはなく、喜ぶような仕草を見せることがある。もともと体を動かすことが好きで、じっとしていられない性質であると思われる。

目指す研究の成果

歩行指導のもたらすものや手だて・配慮事項を整理しながら、A女の生活全般を見直し、より望ましい教育課程や自立活動の指導の在り方をめざす。

研究の内容

1 A女の指導目標

規則正しい生活を送り安定した気持ちを日常のものとし、友だちや教師と楽しく過ごしたり、やり取りを楽しんだりできるようにする。また、体を動かすことに慣れさせながら体力の向上を図る。具体的な目標は、次のように考えた。

(1) 心理的な安定を図る。

急に怒り出したり暴力的になったりして生活のリズムを壊すことがあるので、その原因を探りながら、その対処方法を工夫していく。節目節目の活動を重視して取り組んでいく。

- ・あいさつができる。(自立活動)
- ・1日、1週間リズムにそって生活する。(一日の生活)
- ・教師の日常の声かけに従うことができる。(自立活動・全般)
- ・小集団活動に慣れる。(音楽、体育、朝礼)
- ・簡単な目標を意識することができる。(全般)

(2) コミュニケーション能力の向上をめざす。

生活の流れの中で、自分で見通しの持てる給食などの指示には従えることがあるので、A女の好む活動を取り入れて指導を組み立て、教師の指示やA女からの意思表示が交換できるよう

な場面を設定する。非言語コミュニケーションの活用の幅を広げていく。

- ・指示が分かる。(全般)
- ・友だちを意識することができる。(全般・自立活動)
- ・簡単な会話ができる。(日常生活の指導、自立活動)
- ・意思表示ができる。(日常生活の指導、自立活動、全般)

(3) 身体を活発に動かす。

日常生活の指導や自立活動の時間に体育的な運動要素の活動を取り入れ、運動の幅を広げていく。また、教師が体に触れて行うストレッチなどにも慣れさせる。

- ・遊具、ストレッチなどで体を動かすことに慣れる。(体育、自立活動、日常生活の指導)
- ・歩くことに慣れる。(生活単元学習、自立活動)

2 指導目標と歩行指導の関係

実態の考察から考えた指導のポイントと指導目標、自立活動で歩行指導を取り入れた意図の関係を表わすと図1のようになる。

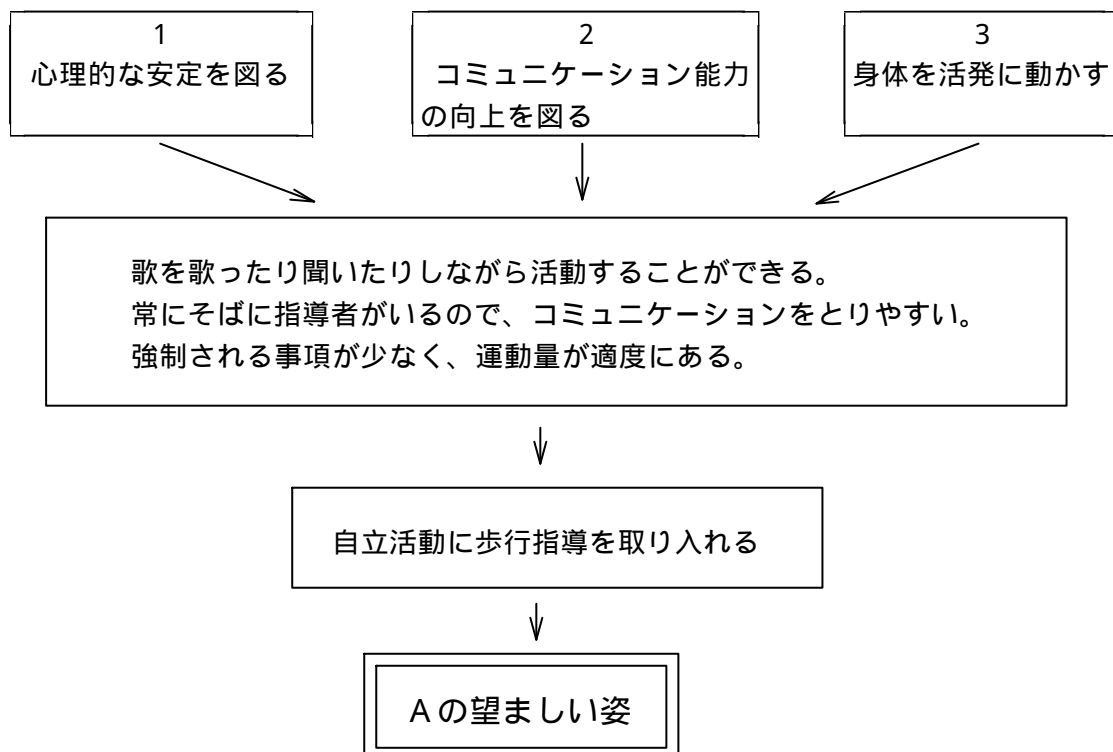


図1 A女の指導関係図

実践

1 歩行指導の概要

(1) 歩行指導の進め方

手引き歩行と音源歩行を実施する。

月・木曜日は、3・4時間目を通して進め、火曜日は、4時間目のみの1単位時間で週3回設定する。

400mルート(学校1周コース)と700mルート(公園コース)と30～40分歩くことに慣れ

させる。

周回コースに慣れてきたら、周回コースに公園で遊具遊びを取り入れたり、距離を長くする近隣に位置する前橋市立第一中学校や前橋刑務所までの往復コースを取り入れる。

歩行後は、休憩を必ず取る。

歩行に行くとき、また終了して休憩になる前に、サインによるコミュニケーションを図る。

(2) 指導上の留意点

特に心理的な安定とコミュニケーションを重視していく。

ア 心理的な安定

歩く前・歩いている間・歩いた後の態度や表情から、心理状態を確かめながら進めていく。不安定なときには、無理をさせないで、そばにいてできるだけ自発的な活動を待つ。

イ コミュニケーション

歩く前・歩いている間・歩いた後に必ず声をかけて、予定・状況・評価を知らせ、言葉に対する反応を読み取っていくようにする。手をにぎったりたたいたりして意思表示をさせるようにする。(座り込み・かみつきの笑顔・歌・踊るような仕草)

ウ 環境の把握

コースの各場所に名前をつけて確認していく。川や公園や道路横断をそのつど伝える。

エ 身体の動き

猫背体型、外股なので、歩くことでそれが改善されるのか、途中座り込んでしまうときの様子なども観察していく。

オ 健康の保持

歩く距離と時間を無理なく伸ばしていく。

2 歩行指導の支援の方法

校舎内の歩行と関連させ、またA女の実態を考慮して、「ひとり歩行」(図2)と、「介添え歩行」(図3)のパターンを取り入れることにした。(歩行指導の手引より)



図2 「ひとり歩行」の種類



図3 「介添え歩行」の種類

3 指導の時間帯

A女の校時表は以下表1のとおりである。

表1 A女の校時表

	月	火	水	木	金
1	日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導
2	生活単元学習	体育	体育	学級活動	美術
3	生活単元学習	音楽	音楽	体育	美術
4	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動
	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導
5・6	日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導	日常生活の指導

は担当者の指導時間

4 指導時間の流れ(1単位時間の指導の流れ)

授業の流れは、2単位時間と1単位時間では、以下表2のように構成した。

()内：1単位時間のとき

表2 授業の流れ

主な活動	指導上の留意点
・脚部のストレッチ(スキンシップ) 20分 (10分)	・声をかけたり、ストレッチをしたりしながら緊張をほぐす。 ・体調や表情を観察する。 ・歩行に行くことを伝える。 ・手に持たせるものを選択させる。
・教室から玄関まで 5～10分	・手引きか音源かを選択させる。 ・その日のコースを選択させる。 ・排泄指導をする。
・歩行 30～40分 (30分)	・手引きでも音源でもA女の好きな曲を口ずさむ。 ・歩いているときに、さしさわりのある自動車や自転車などの情報を伝える。 ・歩き始めから25分ほどで座って、休憩を約5分取る。 ・休憩後は、自ら立つように促す。
・反省と評価(休憩を含む) 10～20分 (5分)	・教室に入ったら手を洗わせる。 ・マットに座らせ、その日の評価を与える。 ・軽いマッサージをする。

5 指導の成果と今後の目標

(1) 歩行指導の成果

これまでの歩行指導の成果と今後の目標を、次の表3に示す。

表3 これまでの成果と今後の目標

これまでの成果	今後の目標
40分を25分(歩く)・5分(休憩)・10分(歩く)と分けて歩けるようになった。	40分を歩きとおす体力を付ける。徐々に時間を伸ばしていく。
担当者と安定して歩ける。	担当者とだけが、歩行学習だと思っている節があるので、いっしょに歩ける相手を増やす。3人歩きから2人歩きへ移行する方法をとる。
止まるときには、言葉をかけながら体を手で制すと止まれるようになった。	いざというとき以外、言葉の指示で止まれるようになる。一時停止にも慣れるようになる。
いやになると座り込むことがあるが、言葉の支援だけで活動が続けることができる。	休みたいときには、何らかの形で意思表示できるようになる。特定の場所を意識し、休めるようになる。
週に2～3回1500m～2000m歩けるようになった。歩くことを楽しんでいる様子が見える。 各月別の成果は、表4に示す。	生活単元学習などとの関連を意識し、活動する場所の変化に慣れる。公園や、駅に行く、ドーナツ店、寄宿舍に行くことなどを取り入れる。
そのときの様子に合わせて、適切な歩き方を選んでいく。ひとり歩行と介添え歩行の6種類の方法に慣れてきた。	いつでもどこでも必要に応じてその場に合った歩き方を取り入れられるようになる。 (音源・手引き・手つなぎ・腕くみ・左右どちら側でサポートするか)
様子を伺いながら、本人のペースに沿って計画し、その場をスムーズに進めるためのコミュニケーションがとれるようになってきた。 ・歩き始めるときの意思確認 ・歩き方の意思表示 ・進路を変えるとき指示 ・手拍子言語の活用	今までどおり様々な方法でコミュニケーションをとりながら、よりスムーズにいく方法に慣れ、特に休憩を取るときと休憩を終了するときにははっきりとした意思表示ができるようになる。
コース途中の公園で、休憩したり遊ぶことができるようになった。	ある程度の時間の制約の中で、遊んだり休憩したりすることができるようになる。コース中に公園で活動する時間も取り入れる。
その場その場に応じたコミュニケーションをとりながら、見通しを持たせて、その流れの中で「がまん」をすること(活動にけじめをつけさせること)を身に付けさせたい。もちろん「がまん」は、それ自体が目的ではない。歩いた後のすがすがしさや、長期的に見れば、健康のためという大きなねらいもある。自分がやりたいこととやらなければならないことを調整する能力も育てていきたい。	

(2) 歩行指導の実施状況

表4に、4月から12月までの歩行指導のコースと周回数、および歩行距離を示す。

表4 A女の今年度4月から12月までの歩行量

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
Aコース	1							
Bコース	2	17	24	12	10	19	10	14
Cコース							1	
実施回数	1	7	10	6	5	8	7	7
月合計	1.8km	11.9km	16.8km	8.4km	7km	13.3km	9km	9.8km

注：Aコース、Bコース、Cコースについては資料参照、数字は周回数

(3) 心理的安定とコミュニケーションの成果

ア 生活のリズム

泣かない、暴れないなどがまず留意することだったが、歩行での教師側の目標は、指導を重ねれば重ねるほど前向きなものになり、互いに時間を共有するような感覚を持てるようになった。歩行中は、教師との間に適度の心地よい緊張感が生まれ、終わるとさわやかな解放感があった。A女の表情からそれがうかがえた。「歩行」は学習の核となり、生活のリズムができた。

イ 人とかかわる楽しさ

歩く前のストレッチでは、体に触れると笑顔で応えるようになり、自分の手で教師の体を引き寄せるような動作をするようになった。ストレッチでは教師が変わっても、同じように反応するようになった。一部の重複障害生徒の声にはまだ拒否反応を示すが、友だちの呼びかけの声には、普通に反応している。歩行中では、常に歌いかけたり話しかけたりする状態なので、そうされることに慣れてきたのか、あるいは欲しているのかは、はっきりとは分からないが、呼びかけを受け止めていることは確かである。「ふざける」ような動作も見られ、これは人との関係を楽しむ余裕とともれる。2学期に入ってから、単一学級の3年生の2名に身体接触を通してかかわれるようになった。保健室や職員室の教師、寄宿舎の指導員に会いに行くことなどを取り入れていけば、人間関係も広がるし、生活空間も広がって行くであろう。

ウ 学習時間と休み時間の区別

教師と一緒に活動する時間と、休む時間の区別がつくようになってきている。教室内でA女の取り組みやすい授業の流れを作り、一連の流れの中で机上での触察や弁別の学習を取り入れたところ、10～15分間教室内での学習にも取り組めるようになった。玉落としや箱への玉入れに楽しそうに取り組む、自分の行為と結果の因果関係を理解し始めてきている。認知や触察の学習課題の見通しを持つことができた。

おわりに

1 教育課程について

他害の傾向のあったA女の指導にあたって、まず最初に取り入れたのは、A女が「快」と感じる感覚や運動である。それらを発展させていくうちに、他害の傾向は減り始め、今では新たな学習段階に進めるようになった。これは、この実践での大きな成果である。そこで指導上課題となってくることは、重複障害の生徒の自立活動を中心とした指導のあり方である。年度当

初に、教育課程は編成され、それにもなって指導計画が組まれ、指導が進められていく。

しかし、実際には1学期と2学期と3学期では、同じ校時表でも、かなり指導内容や形態・方法が変わってくる。本校は、単一学級と重複学級が学部内に並存していて、基本的には教科担任制である。そんな現実だからこそ、学部内で年間通して重複障害生徒の指導を確認していく方法を考えていかなければならない。特に、中学部の重度重複学級では、日常生活の指導と自立活動を主とする教育課程が必要であると考ええる。

2 言語について

まだ言語によるコミュニケーションを獲得していないA女と対するとき、要求伝達系と相互伝達系の言葉かけの区別を学び、自分自身の言葉かけを改めて見直す良いきっかけになった。言葉の持つ効用を考えると、伝達要求系の言葉を中心に考えてしまっていたが、人間関係をより良くしたり、潤いをもたらすのは、相互伝達系の言葉である。A女は、自ら言葉を発しなくても、言語理解能力は育っているに違いなく、だからこそ要求伝達系だけでなく相互伝達系の言葉も重視して言語環境を整えていかなければならないと感じた。

3 地域の協力

歩行コースに面している家のおじいさんが、Aの名前を覚えてくれ、「Aちゃん、がんばってるね。」「今日は、元気がないよ。」などと、声を掛けてくれるようになった。外に出ることで物理的環境の広がりを期待したが、思わぬところで人的環境も広がり、予期せぬ収穫もあった。

盲学校周辺は、公園が散在している。視覚障害をともなう知的障害者にとって、公園は探索活動や触察活動に絶好の場所である。季節感のある植物、ほどよい危険性、適度な遊具、砂地など、これからも積極的に活用する方策を立てていきたい。

参考文献

- ・文部省 『視覚障害児の発達と学習』 株式会社 ギョウセイ(1984)
- ・文部省 『歩行指導の手引』 慶應義塾大学出版会(1985)
- ・香川 邦生 著 『視覚障害教育に携わる方のために』 慶應義塾大学出版会(1997)
- ・香川邦生・藤田和弘 編 『自立活動の指導』 教育出版(2000)
- ・全国心身障害児福祉財団 『自立活動指導ハンドブック』 原 孔版(2001)

資料

盲学校中重度重複障害学級の教育課程

教育課程：中学部中重度重複障害学級

教科・領域	時間数
国語	—
数学	—
社会	—
理科	—
音楽	68
美術	68
保健体育	104
職業家庭	—
道徳	—
特別活動	35
自立活動	210
総合的な学習の時間	45
総授業時数	945

「領域・教科を合わせた指導」とし、指導形態は「日常生活の指導」「生活単元学習」とする。

週時間割 中学部中重度重複障害学級

	月	火	水	木	金
1	日常生活の指導				
2	生 単	体 育	体 育	学 活	美 術
3	生 単	音 楽	音 楽	体 育	美 術
4	自立活動				
5	日常生活の指導				総 合
6					日 生

歩行コース

